

人文学会報

87号
2024. 3. 17

事務局

〒890-0005 鹿児島市下伊敷一丁目52番1号
鹿児島県立短期大学 文学科 日文学料室

鹿児島県立短期大学 人文学会

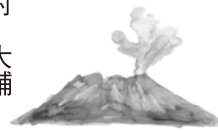
電話(〇九九)三〇一―二二一

〈研究室だより〉

今号は、今年度着任された米村大輔先生と、半年間東京で国内留学をされた石井英里子先生にご寄稿いただきました。

着任挨拶

米村 大輔



です。

生まれて初めて鹿児島島の地に参りましたが、気候・地質・景観など独特でダイナミックな風土に驚くことばかりでした。初めて鹿児島中央駅に降りた時、目の前に聳える桜島に圧倒されました。そしてその頂からモクモクと噴煙が！慌てて避難しようとしたのですが、周りの人たちを見て漸くこれが日常なのだと思がつかまりました。そして朝、家の玄関を出た時に眼前に広がる雪景色・・・ではなく灰景色！火山灰で黒からアッシュグレーにお洒落に塗り替えられた車での出勤！鹿児島島に来て半年がたった今でも毎日がとても新鮮です。また、マグマの影響でしょうか数えきれないほどある天然温泉に元気をもらっています。桜島の周りを囲むように位置している鹿児島は桜島から「難と恩」を受け、鹿児島に住む人たちの日々の営みは桜島と共にあるのだと感じてい

ます。

鹿児島のことばもまた独特だと感じました。「だからよお」、「おやつとさあ」、「なんつあならん」。特にご年配の人たちのことばは難解でした。九州の他地域とも大きく違うような気がします。一説によるとそのルーツは江戸時代、外様大名だった島津家が幕府から機密情報を守るために作ったのだとか。ただ、どういうわけか老若男女に拘らず鹿児島のことばにとっても心癒されます。なんだろう？あの暖かく包み込まれるような感覚・・・。イントネーションや言い回しでこうも伝わり方が違うのでしょうか？ことばにはとても不思議な力があるのだと思います。人が長い長い歴史の中で築いてきたことば、人と人とを繋ぐことば。傷つけられるにせよ、支えられるにせよ、どこまでも深く人の中に入り込んでくることば。これまでことばについて(外国語ですが)勉強

二〇二三年四月に本学に着任いたしました米村大輔と申します。文学科英語英文学専攻に所属しております。縁あって静岡より参りました。富士山そして駿河湾を望み、自然に囲まれた学校で四半世紀にわたり外国語の教員をしておりました。なだらかではありませんが日本平という山腹に位置しており、学生時代から毎日、徒歩で「山登り通勤(通学)」をしてきたせいか、今でも体を動かすことが大好き

し、教えてきましたがいまだに霧の中にいるようでうまく掴みきれません。それだけにやはりことばの勉強は実に楽しいものだと思います。そこに暮らす人たちの考え方、思い、文化。そうしたことを知ることにも、そして伝えることにもことばの勉強は極めて有用です。鹿児島の人たちのことばに直に触れ、それは外国語学習・母国語学習に関係なくそうなのだと思えました。また、実際のコミュニケーションからだけでなく文法や語彙を学ぶことから、自分の国や地域とは違う考え方や文化を知ることができる。

これは特に外国語を学ぶことで初めて得られる感覚です。「人は決して分かり合えることはない」。心理学者のアルフレッド・アドラーはこう言っています。だからこそ人はもっと分かり合いたい、どこまでも深く繋がりたいと思うのだろうか、分かり合おうとすることで自分のことをもっと深く知ることができる。それはやがて民族のあるいは一人の人間としてのアイデンティティの確立につながっていくのかも知れません。外国語を学ぶ目的

も、本質的にはそのあたりにあるのではないかと思えます。

車通りの激しい騒然とした三号線から県短の門をくぐると、様々な木々が生い茂る自然豊かな別世界。黄金色の銀杏、虫の音色、金木犀の香り・・・五感を心地よく刺激し、楽しませてくれます。牧歌的な雰囲気にな堵感を覚えると同時に何処か懐かしさを感じたりします。かつては富士山に、今は桜島に見守られながら学生の皆さんと共に楽しくことばの勉強をしていきたいと思えます。どうぞよろしくお願ひします。

(文学科英語英文学専攻 助教)

啐啄同時

(そったくどうじ)

石井 英里子

二〇二三年四月から十月までの半年間、母校の上智大学で客員研究員として、研究活動中心の生活をしておりました。まず、このような国内留学という貴重な

機会とそのサポートをしていただいた文
学科の先生方に感謝申し上げます。そし
て半年間ほったらかしにしてしまいまし
た学生、特にゼミのメンバーの皆さん、
ごめんなさい。皆様のおかげで、自分自
身と向き合う時間をたくさん持つことが
でき、とても充実した時間を過ごすこと
ができました。本当にありがとうございます。

国内留学先の母校では、学部から博士
課程まで総合人間科学部教育学科に所属
していました。教育学にもさまざまな領
域があるのですが、「教育方法学

(Curriculum and Instruction)」が専門で

す。そこで今日は私の研究領域について
少しお話しさせていただきます。

カリキュラムとは、狭義では教育内容を
指しますが、広義では学習環境の整備
などを含めた学校経営にも関わります。

私は、「どんな教育内容を、どんな順序で
並べると、最も効果的な学びが実現され
るか」という課題に強い関心がある一方
で、どのような条件下で最適な学びや協
働的な学びの実現が可能になるのかとい

うことにも強く興味があり、特に海外へ行く際には、学校建築を見学に行くことが多いです。

例えば、以前出張でフィンランドへ行った際には、学びの実現が計算されたユバスキュラ大学の校舎をみて大変衝撃を受けました。可動式で自由度が高く見た目にも美しい多機能的な教室や机と椅子、明るく塗装された壁やモダンであったかな雰囲気のある北欧柄のカーテンは、多くの学生の学ぶ意欲を自然と引き出し、その結果非常に創造性の高い学びの成果を実現するのだらうと思います。

一方、日本では、教室の前に設置された教壇に教える人が立ち、児童／生徒／学生は全員同じ方向を向いて座り学ぶスタイルが主流ですが、このレイアウトが日本に輸入された百五十年くらい前から実はほとんど変化していないと言われています。口述→紙媒体→電子媒体と教育に関わるメディアは著しく変化し、これまでに以上にも多様な活動が可能になったのにも関わらず、私達は百五十年前と同じ教室を少しも疑いません。それはなぜで

しょうか。

とまあ、こんなことを考える学問「教育学」を私は生業にしております。異文化教育が主な研究領域、研究対象は主に中学生や高校生です。どのようなタイプの生徒が、どのような条件下で最適な学びを実現するのか、その最適な組み合わせは何かという「適性処遇交互作用」について研究しています。

例えば、外国語教育では、「言語不安」がよく研究されています。言語不安の高い学習者においては、外国語学習に欠かせない他の学習者とのやり取りや人前での発表に対して抱く非常に強い不安が足を引く張って学習を妨げるなんて言うことがよくあります。一方、言語不安の低い学習者は、発表や他者とのやり取りに対して抵抗感を持っていませんので、練習する機会が増え、その言語を習得しやすいくというわけです。

それではこのような学習者の言語不安の違いを考慮せずに、全員に対して同じ方法で教えたらどうなるでしょうか。おおよその結果は予測できるはずですが。

不安が高い学習者よりも低い学習者の方がより多くの学びを得る可能性が高くなるでしょう。このように、適性の異なる学習者に対して、ある手法で教えた場合、その学習効果が不安レベルのあるところと逆転する現象を特定し、特に学習が難しい学習者（この場合不安が高い学習者）にとってより良い教育方法は何かを探るというのが私の研究主題です。

最後に、タイトルにある啐啄同時という言葉についてここで触れたいと思います。広辞苑によると、「啐啄同時」とは、「禪宗で、師家と弟子とのはたらきが合致すること」という仏教用語です。「啐」は「鶏の卵がかえる時、殻の中で雛がつつき音」、「啄」は「母鶏が殻を外からつつき破ること」と定義されています。研究活動だけでなく、日々の教育実践においても、学びを導く者として、成長する学生の皆さんとの間に生まれる絶妙のタイミングを掴み取れるように、日々精進して参りたいと思います。

（文学科英語英文学専攻 准教授）

積み重ねと感謝と

池田 礼葉

これまでの学生生活を振り返ると、全てが積み重ねの日々だったということを実感します。

私が新入生として鹿児島県立短期大学の門をくぐったのは、平成三十一年四月のことでした。大学がどのような場所なのかもまだはつきり分らないまま、ただ文学に関する勉強がしたいという一心で入学を決めました。一コマ九十分の講義、崩し字、中国語、そして空きコマ。全てが新鮮でした。思い出は数えきれないほどあります。今回は、この場を借りてその幾つかをご紹介します。

私の中で最も鮮明に残っている記憶は、中国の南京農業大学への二週間にわたる短期研修です。初めての海外でした。南京農業大学の先生による中国語習得のための講義、学生との交流、本場の中国

料理。休日は三国志と所縁の深い鎮江へと足を伸ばしました。中国で見た景色、出会ったあらゆる人や物事は、私に日本と中国両方の文化やその良さについて考えさせるための良い機会となりました。現地で友人もでき、外国人への印象が変わりました。

次に印象深いのは卒業論文作成です。

自分自身で題材を見つけ、初めて研究者の書く「論文」と呼ばれるものを読み、初めて一万字を超える長い文章を書きました。卒業論文の「そ」の字も「ろ」の字もろくに理解していません。始めたことだったので、不安も大いにありましたが、先生のご指導のもと、友人と励ましあって書き上げることができました。研究を進めていく上で頭に浮かんだのは学期末に課されるレポートのことでした。学生自身がテーマを見つけ、それについて書くというものです。県立短大に在籍していた頃の私は、「先生が題材を指定してくれたら書きやすいのに」という思いをしばしば抱いていましたが、卒業論文を作成するにあたって、レポートの題材を

指定されなかった理由について気づく所となりました。おそらく、疑問点や課題点を見つけるための訓練の一環だったのでしょうか。

最後にサークル活動についてお話ししておきたいと思います。私は在学時、茶道サークルとKLC（県短ライブラリークラブ）に所属していました。和気藹々とした雰囲気と自分のペースで進めていくことのできる活動内容に強く惹かれたというのが、入部した理由でした。茶道サークルではお点前の仕方や礼儀作法を学び、KLCではお勧めの本を紹介したり、鹿児島市立図書館で子どもたちに本の読み聞かせを行ったり等、本に関する活動をしていました。気分転換をしたい時や思い通りにいかない時、この二つのサークルは私の中で憩いの場となりました。サークルでできた友人たちとは、卒業した今も折に触れて連絡を取り合っています。

そして現在、私は鹿児島大学教育学部に所属しています。ゼミは中国文学を希望しました。県立短大で日本文学を学ぶ

うちにその礎となった中国文学に関心を持つようになり、更に鹿児島大学で受講した漢文学の講義がとても面白く更に深く学んでみたいと思うようになったためです。先生のご指導のもと、二回目の卒業論文を執筆しています。留学生と関わる機会も多くあり、彼らの祖国の話を聞いたり、日本の話をしたりすることはとても楽しく、貴重な時間です。また、中学の時の母校で定期的に行われる読み聞かせボランティアにも個人で参加するようになりました。

このように現在の私を形作っているものは、元を辿るとすべて県立短大での生活へと帰結します。たった二年間、されど二年間。大切なことをたくさん教えてくれた場所でした。

来年度、私は大学院進学のため故郷である鹿児島を離れます。学業の面でも生活の面でも不安はつきません。しかし、見知らぬ土地で新しい人間関係を築き、興味のある分野を研究していくことで自分自身がどのように変わっていくのか楽しみでもあります。県立短大で学んだ

ことを忘れず、これからも精進していきたいと思えます。

「ありがたい。県短」

(二〇二二年三月 日本語日本文学専攻卒業
現在、鹿児島大学教育学部四年在学中)



野上 夏鈴

司書という仕事に就いて 感じたこと

私は今、鹿児島国際大学の図書館で図書館スタッフ(司書)として働いています。二〇二三年三月に県短を卒業した後、司書の資格を取得することを決めました。

県短で、国語の教員免許(二種)と司書教諭の資格を取りましたが、自分の中で「司書」になりたい気持ちの方が強かったというのが理由です。県短で司書教諭の授業を受けたり、教育実習先の図書室や県短の図書館によく行き司書の方と関わったりするなかで、改めて図書館の雰囲気心地よく、自分に合っているなと

感じ、司書や司書教諭には図書館と学生や先生を繋ぐという役割があるということとを学び、自分もそうなりたいなと強く思いました。

ここで司書資格取得から鹿児島国際大学で働くまでの経緯を説明させていただきます。私が別府大学の司書講習について知ったのは学生のときに所属していたKLCという図書館のサークルで司書の方に相談したときでした。その司書の方の知り合いの方が別府大学の司書講習で資格を取得したと聞き、講習があることしか知らなかった私はその後実際に調べてみました。そうすると、二〇二二年はオンラインで司書講習が開講していたことが分かりました。パンフレットも取り寄せて情報を集め、一度も別府大学に通わず自宅からでも受けられることも分かったのです。その講習を受けることにしました。二〇二三年もオンラインでの開講だったので、同年の八月〜十月の期間で受講しました。オンデマンド型授業(動画やパワーポイントの資料と教科書を見ながら受ける授業)の期間とライブ型

授業（ズームを繋いで受ける授業）の期間があり、期間ごとに受ける授業と出す課題が決まっています。二ヶ月という短い期間の中で、図書館についてだけではなく、情報検索や分類・目録、レファレンスの対応についてなどより専門性の高い内容を課題やレポートに取り組みつつ理解していくのが少し難しく感じましたが、ズームを使って他県の年齢や性別の異なる学生の方と交流できたことも含めて楽しく、自分の考えや視野を新たに広げることができたと感じています。十一月に無事に司書資格を取得し、司書の求人を探していたところ、紀伊國屋書店から出ている大学図書館のカウンター業務スタッフの求人を見つけました。最寄り駅が坂之上駅となっていたため、電話で担当の方に確認すると勤務先の大学が鹿児島国際大学であることが判明し、梶短で司書教諭の授業を受けていたとき、鹿児島国際大学の岩下雅子先生の授業を取っていて交流させて頂いていて、高校時代の友人が通っていたので交流のある人がいるところのほうが働きやすい

だろうと考え、その求人に応募しました。その後十二月から契約社員として採用され、今働いているという経緯となります。司書の求人はなかなか空きが出にくいこともあり、数自体が少なく正規よりも非正規の方が多いというのが現状です。そのため、今回資格取得後すぐに働くことができたのはとてもタイミングが良かったのだろうと思っています。

梶短に通っていた二年間は、今振り返ってみてもとても充実していたと思います。趣味の合う友人やサークルで出会った友人、先輩、後輩と授業や活動の時間などを通じて楽しい時間を過ごさせていたと思いますし、これからも大切にしたい縁に恵まれたと実感しています。ゼミは近代文学に所属し太宰治の『斜陽』を題材に卒論を書きましたが、それ以外の当時受けていた講義はどれも新しく学ぶことばかりで、とても勉強になるものばかりでした。

今大学図書館で司書として働いていて、図書館という場の多様性を感じています。カウンター対応には本の貸出・返却、教

員や学生が使用可能な部屋の予約などがあり、他にも図書・雑誌の配架、マルチメディアスペース（パソコンが自由に使える場所）を含むフロアの見回りなどが多岐に渡ります。これらを実際にこなしていく中で、読書の場ではなく、授業を受ける場、レポートなどに取り組み場など様々な「場」があり、その場をより円滑に居心地の良い「場」にする手助けを「司書」が担っているのではないかと考えるようになりました。図書館、人、本、それぞれの繋がりを大切にして自分の仕事に誇りをもてるように日々努力し続けます。これから働いていく中で司書という仕事の良い面・悪い面それぞれ発見していくとは思いますが、それもこの仕事の魅力と捉え、楽しむ気持ちを忘れず利用してくれる方が自然と足が向くような図書館をつくれる司書になれるようこれからも頑張ります。

（二〇二三年三月 日本語日本文学専攻卒業
現在、鹿児島国際大学図書館スタッフ）

“As is a tale, so is life:
not how long it is, but how
good it is, is what matters.”



大田 真純

今回、執筆依頼の連絡をいただき、正直、お引き受けするか迷いましたが、この機会に自分の人生を振り返ることも悪くないと考え、思い切つて引き受けました。しかし、過去の会報を読み、引き受けたことをすぐに後悔しました。同期は海外の大学へ編入し外資系企業に就職。または、働きながら二部の大学を卒業し客室乗務員など各々の目標や夢を叶えていたからです。在学時に頑張ったこともなければ、素晴らしい経歴もないですが、寄り道だらけの私の人生を皆さんにシェアしたいと思います。

県短卒業後、短期留学を経て、日本語教師の講座を受講し、県内で技能実習生を対象とした日本語教師として働きはじめましたが、様々な職場で役立てるスキルを

身につけたいと思い、鹿児島県弁護士会へ転職しました。業務には慣れつつありましたが、コロナが終息に向かっていく中で、改めて今後の人生について考えるようになり、ずっと心残りであった四年制大学卒業への思いと以前から興味を持っていたアートの勉強をしたいという思いが強くなり、来年度より鹿児島大学人文学科へ編入することになりました。二十代後半という年齢は「若い」と捉える人もいますし、新たなことを始めるには「遅い」と捉える人もいます。私自身、どちらの感覚も理解できます。普段、自分の年齢を意識することはないですが、給料や賞与がなくなることを恐れるくらいには、いつの間にか大人になっていたようです。それでも編入という道を選択したのは、人間はどの道を選択しても選択しなかった道に後悔が残ると思います。後悔への思いは仕方ないとしても、せめて心残りを少なくし、少しでも興味がある道に行けば、辿り着くべきところに辿り着けるのではないかと考えたからです。とは言っても、私は決して「遠回

り」を勧める訳ではありません。決まった目標や夢があるのであれば、最短ルートで行けることに越したことはないと思います。ただ、たとえ回り道をしたとしても無駄ではなく、遠回りした分、得るものもあるのではないのでしょうか。夢や目標があるのであれば、それを追いかけるのも良いと思います。どのような人生を歩むとしても、一つだけ注意点として、二〇〇八年ハーバード大学での J・K・ローリングの言葉を紹介しておきます。

“There is an expiry date on blaming your parents for steering you in the wrong direction: the moment you are old enough to take the wheel, responsibility lies with you.” (自分を間違えた方向に導いた親を責めるには期限があります。自分でハンドルを握れる年齢になった時点で、責任は自分にあるのです。)

さて、私の県短での卒論は「コメントスピーチ」をテーマにしました。「コメントスピーチ」とは、アメリカ

カの大学で卒業式に学外の人間を招き、学生たちに向けて演説をってもらうという習慣のことです。「卒業する」は英語で“graduate”であり、「卒業式」は“graduation ceremony”と呼ばれると思われがちですが、「始まり」「開始」を意味する“commencement”を使って、“commencement exercises”と言われることも多いです。私の卒論では、特に、

ステイブ・ジョブズとJ・K・ローリングのスタンフォード大学とハーバード大学で行われたコメントスピーチを取り上げました。前述したJ・K・ローリングの言葉もコメントスピーチから抜粋したものです。ステイブ・ジョブズのコメントスピーチでは、「点と点の繋がりは予測できない」と述べています。私の二十代はできる限り多くの経験を積み、なるべく沢山の点を作る作業をしていきたいと思っています。その点が繋がると信じつつ邁進し、三十代からその点がどのように繋がっていくか私自身も楽しみです。二十代後半での新たな始まり。できれば、十年後

ぐらいにまた機会があれば、私の近況をご紹介します。最後に、J・K・ローリングの言葉を紹介します。「人生は物語と同じである。大切なのは長さではなく、内容である。」(二〇一七年三月 英語英文学専攻卒業 二〇二四年四月、鹿児島大学人文学科編入予定)



人とこの財産

佐野 未来

県短を卒業して、社会人になって四年の月日が経とうとしています。自分の中で初めての異動を迎えるこの社会人四年目というのはいつの節目の年で、そんな年にこれまでを振り返るきっかけになる本会報への投稿の連絡をくれたErikko(石井准教授)に感謝しています。正直、県短は第一志望の進路ではありませんでした。でも今振り返ってみると、大事な

人たちに巡り会えた最高の二年間だったと自信を持って言えます。

県短で過ごした二年間には数え切れないほどの思い出がありますが、私が今の環境で過ごしていく上で大きな糧となっている「出会い」についてお話ししたいと思います。

一つ目の大切な出会いをくれたのは教職課程を履修したことです。入学して最初の履修登録。忙しくなるのは分かっていたけれど在学中に取れる資格は取ろうと教職科目を履修しました。私が入学した年の英文専攻は四十四人、その中で教職を履修したのはわずか五人でした。最初のうちは、専攻科目の履修に加えて教職の必修科目で埋まる時間割にめげそうになり、教職をやめようかと思ったことが何回もありました。そんな私が最後まで二年間やり遂げられたのは、一緒に課題をこなし、時には愚痴も言い合いながら共に頑張ってくれた教職仲間がいたからです。英文専攻はもちろんのこと、教職必修で一緒になる他専攻の友人もたくさんできました。卒業した今でも県外へ

行った友人が帰省してくると集まって、学生時代の良い思い出もそうでない思い出も、笑い合いながら話せる友人は一生の財産です。教員にはならなかったものの、私が現在の仕事に就いたのも教職を履修していたことが大きく背中を押してくれたと思います。

二つ目は自治会活動です。県短の授業以外の行事運営は自治会が担っているといっても過言ではありません。入学してすぐ開催される新歓から始まり、体育祭・浴衣でい、県大祭と学校全体を巻き込んだ行事を運営する先輩方が輝いて見えて、自分も自治会に入ろうと決めました。同学年だけではなく、卒業した今でも連絡を取る先輩方と仲良くなれたのも自治会に入ったからだと思います。先輩方が卒業して私たちの代だけになった自治会役員は五十名近くいました。それまで関わってこなかった他専攻の学生や後輩・先生方との関わりも行事を重ねるごとに深くなり、二年間の学生生活をさらに色濃いのものにしてくれたと思います。

県短を卒業後、私は鹿児島県教育庁に

入庁し、大隅半島の鹿屋市にある高校で事務職員として働いています。私の高校時代を振り返ると事務職員と関わる機会は全くなかったように思いますが、現在の職場では生徒と他愛もない話をしたり、行事や部活に参加したり、仲良くなった卒業生とごはんに行ったりと想像以上に生徒と関わりが多く、仕事の中にも楽しい息抜きの時間をもらっています。今でこそこんな時を過ごしていますが、入庁した年はコロナ禍のはじまり。人との関わりが制限された上に初めての仕事と環境、一人暮らしと不安だらけの生活でした。そんな私の支えとなってくれたのも県短で出会った友人と先生方です。仕事面では慣れない業務と専門用語に悪戦苦闘する悩みを共有し、分からないことはすぐに相談できる同期と、県短に顔を出せば気軽に何でも話せる先生方がいて、知らない土地での一人暮らしも鹿屋に就職した友人と息抜きドライブ・ごはんに行って楽しめました。これもすべて県短で得た「人」という財産のおかげです。

人はひとりで生きていくことはできま

せん。仕事でも日々の生活でも「人」との関わりは連続です。高校三年生でもともと別の進路を考えていた私ですが、県短に入学して「人」という財産の大切さを実感しました。県短で出会った先生方・友人はもちろん、これから先の「人」との出会いも大切にしていきたいと思いません。

(二〇二〇年三月 英語英文学専攻卒業
現在、鹿児島県職員)



〈卒業にあたって〉

過ぎ去りし日々に 想いを馳せて

文学科日本語日本文学専攻

江口 佳穂

二〇二二年四月、私は鹿児島県立短期大学に入学しました。この日から私の二年間に及ぶ県短生活が始まり、様々な出会いと学びの日々が訪れたのです。

そこから遡ることひと月前、私は受験という大きな試練から「挫折」を味わうことになりました。高校卒業後は県外の大学で一人暮らし。そんな日々を夢に描いていた私の前には、いくつもの「不合格」の通知書がありました。そんな中、唯一自分が「ここで学びたい」と思える大学の「合格通知書」が送られてきます。それが鹿児島県立短期大学でした。その合格通知書を受け取ったとき、私の心は決まりました。二年間自分が勉強したいと思っていた日本文学を存分に学ぼう。

そう決意したのです。そこから流れるように時が過ぎ、入学式当日を迎え、私の新しい学校生活が始まりました。

そこで私は初めて「学ぶ」ということの深さを知ることになります。それまでは「与えられる」学びだったものが「自らに与える」学びへと変化し、自ら問いを見つけ探求することの難しさと楽しさを実感しました。また、多くの講義を通してそれまで知らなかった知識や考え方を学び吸収して、徐々により広い視野で物事を考えられるようになっていきました。

そうして友人とともに日々を送る中、瞬く間に時は過ぎていき、再び「進路」を考える時期となりました。一年を通して将来のことを考えたときに真っ先に導き出された答えが「編入」の道でした。元々私は海外の文学への興味があり、高校時代は様々な国の文学を学ぶことのできる学科に進むことを考えていました。そのこともあって、今学んでいる日本語日本文学専攻での学びを生かすには編入しかないと考えたのです。そこで始めたのが小論文対策と英語の勉強、そして新

聞の読み込みでした。私の志望校の編入試験が小論文、外国語の試験、面接であったため、全てを網羅すべく日々の学習に加えて編入対策の勉強にも勤しみました。そこで再び大きな壁に直面することになります。小論文を書いて添削を受ける度、自分の思考の未熟さを痛感し、普段如何に自分が物事を浅く捉えているのかを思い知ることになったのです。

そんな挑戦と挫折の日々を繰り返していくうちに、私は二年生へと進級し、早々に編入試験へと臨むこととなります。今まで先生方から教わったことを胸に自分の成長を信じて挑んだ結果、自分の全ての力を出し尽くすことができました。そして合格発表当日、友人が隣で見守ってくれる中無事「合格」の通知が届き、喜びと安堵、そしてそれまで支えてくださった方々への感謝の気持ちがこみ上げてきました。

進路が決まると、次はいよいよ卒業論文の制作が始まりました。自らテーマを決めて文献調査や考察などを行う作業は、これまでの県短の学びで得た「自ら積極

的に学ぶ姿勢」を存分に生かすものとなりました。しかしそこには当然苦難が待ち受けていて、自分で何かを研究することに對し苦悩する時間も少なくなかったです。そんな日々を友人たちとともに乗り越え、こうして今、卒業を迎えています。

これまでの二年間を振り返ってみると、過ぎ去った日々はどれも充実したもので、ばかりで、たくさんの思い出に溢れています。それも全て、ともに時間を過ごしたかけがえのない友人たちやこれまでご指導くださった先生方の存在なくして語れるものではありません。この二年間は私の人生の中でも大きな財産となり残り続けると確信しています。この鹿児島県立短期大学で学び得た経験を胸に、私は人生の新たな道を歩んでいきます。



二年間の学びを活かして

文学科日本語日本文学専攻

山口 愛佳

私が県短に入学しようと思ったのは、

オープンキャンパスで受けた近代文学の体験授業が楽しかったからです。友人に誘われて参加したオープンキャンパスだったので、その一回の授業で入学を決めるほど、私にとって印象深い授業でした。体験授業では、小学校の国語の授業で扱った「ごんぎつね」の考察を行いました。一冊の本と徹底的に向き合うことの面白さや、自分の知識だけでは出てこないような新たな読みを知る楽しさと出会えた授業でした。「この授業をまた受きたい！」というその一心で入学を決めました。

入学当初は、高校生活までとの違いに戸惑うこともありましたが、

シラバスを見ながら、自分だけの時間割を作るのも、とても時間がかかりました。

単位を取り損ねるのが怖くてたくさん講義を詰め込んだ結果、一年生の時はほとんどフルコマでした。四年制大学に通う友人に比べたら、学校にいる時間が長い時間割でしたが、日文の新しい友人たちと仲を深めた大切な時間になりました。一つ空きコマがあれば、一時間半の遊び時間で、近所のクレープ屋に行ったり、百均で買ってきたトランプで遊んだり、とても充実した時間だったと思います。

ゼミも、毎週楽しみにしていた時間でした。体験授業を受けた近代文学のゼミに入ることができました。ゼミでは、ビブリオバトルや自分が気になった新聞記事の紹介など、文学に関する話し合いの機会が多くありました。同じ近代文学に興味を持つ学生の集まりでしたが、それぞれ興味のある分野は異なっており、自分にはない視点を新たに得ることができました。自分が手に取ることでないような本の紹介を聞いて、図書館や本屋に立ち寄ることもよくありました。異なる意見が出たときに、より議論を深めていく活動も新鮮でした。異なる考えと並

人生最良の選択

文学科英語英文学専攻

加治 樺音

べること、自分の考えがより深まることを知りました。そのおかげで高校までの話し合い活動に比べて、積極的に自分の意見を伝えるようになりました。ゼミの時間を通して、文学と向き合う時間がより好きになりました。また、ゼミでは文学以外の分野からも新たに刺激をもらえる時間でした。卒論を書き始める時期になると、時間の使い方やおすすめの気分転換を教えあったりしました。スケジュール帳により細かくメモを取る癖がついたのも、ゼミの影響だと思います。

この癖は、心配性な私を大いに助けてくれました。

二年生になって、就活をする際には学生課の先生にもお世話になりました。公務員模試の申し込みの時から内定が決まるまでの間、何度も励まされました。

コロナによる制限が解除されていく二年でもありました。高校生活は、昼食時間の黙食や学校行事の中止などコロナによる制限を受けた時期でもありました。

高校を卒業し、県短での生活が進むとともに、制限も徐々に解除されていきま

した。気づけば、一つ飛ばしに席に貼られていた使用禁止の紙も取られ、友人とおしゃべりしながら昼食を食べ、隣の席で授業を受けていました。当たり前に、友人や先生と顔を合わせて学校生活を送れることの喜びを改めて感じられた二年間でした。

今年の四月から、市職員としての生活が始まります。私がこの仕事に興味を持つきっかけの一つに県短での学びがあります。県短で、鹿児島弁について学ぶ機会がありました。その際、ふだん身近にあるものでも、まだまだ知らないことがたくさんあることの面白さに気づきました。

また、文学作品は、その作品が生まれた時代やその時代に影響を持った考え方や、さまざまなお見えづらなものの影響を受けていることを知りました。

市職員の仕事は、ふだん見えづらけれどそこに暮らす人々をたしかに支える仕事だと思っています。不安なこともあります。県短での学びを活かして四月から頑張っていきたいです。

「最良の選択って何だろう？」人生の大きな岐路にたつたとき、この思いが頭をよぎり、優柔不断な私はいつも頭を悩ませていきます。しかし、結局はどちらかを選んでかなりの時間が経ってみないとわからないことが多いのではないかと思います。どの大学を受験して入学するのか、夢を追いかけられるのかそれとも諦めるのか。人生は選択の連続で、これまでの選択が正解なのか、間違いなのか、私にはわかりません。ですが、これだけは胸を張って言えるでしょう。それは、「県短を選んだよかった」ということです。

卒業を目前に控え、県短での二年間を振り返ってみると、これまでの人生の中で一番充実した二年間だったように感じます。その中でも特に私の心の中に残った思い出をいくつか紹介したいと思います。

一つ目は、かけがえのない友人たちに出会えたことです。当初英文専攻には知り合いが誰もいなかったため、オリエンテーションの日は楽しみよりも不安の方が大きかったことを覚えています。しかし、多くの人が気さくに声をかけてくれて、すぐになじむことができました。毎日県短に通うのが楽しくなりました。私の友人たちはそれぞれの個性や好きなものを互いに尊重しあっていて、「それいいよね」とか「私もその曲聴いてみたよ」と褒め合う関係性が素敵だなと思います。そんな友人たちがいたからこそ、飾ることなくありのままの自分でいられたのではないかと思っています。また、授業やゼミのディスカッションを通して、友人たちから自分一人では思いつかなかったような多様な意見を聞いて新たな発見をすることもあり、沢山の刺激をもらいました。

二つ目は、編入学に挑戦する過程で自分と向き合ったことです。私は県短に入学する前から、四年制大学に編入しようと考えていましたが、具体的に何を学びたいのか、将来何をしたいのか漠然とし

か考えていませんでした。二年生となり就活に励む友人の姿を見かける機会も増え、「そろそろ自分の将来を考えなければ」と思うようになった私は、取り寄せた大学のパンフレットとにらめっこをしながら、自分の興味は何なのか模索する日々が続きました。しかし、ある日県短での講義を受ける中で、これだ！と思える分野を見つけ、受験する大学や学部を決めました。優柔不断な私にとっては進学先を選ぶこともなかなか根気のいることで、それなりに大変だったのですが、本当に大変だったのはその後でした。莫大な文字数の小論文や志望理由書に度重なる挫折：何度心が折れかけたかわかりません。それでも頑張れたのは、ゼミの先生や学生課の方々の熱心な指導と、友人たちの応援、そして家族の支えのおかげです。また、同じように編入を志す友人の存在も私にとって大きな励みになりました。こうして私は三か月間の受験シーズンを乗り越え、県短に入学してから新たに見つけた憧れの大学から合格をいただくことができ、現在は新生活に

向けての準備を進めています。私が受験対策に励んでいる間や新生活の準備をしている今この瞬間にも、日本国内外で痛ましい自然災害や戦争が起こっており、こうして家族や友人たち、先生方と何気ない日々を過ごせるありがたみを常々実感しています。このありがたみをかみしめながら、新たな場所でも励みたいと思います。二年間、本当に楽しい時間をありがとうございました！

最後にいつも私が迷ったときに聴いている、上白石萌音さんの曲「チヨイス」の歌詞をみなさんに贈りたいと思います。「取捨選択の連続／生きることは選ぶこと／どこに転んでも生きること／どこに転んでも生きること」

みなさんの今後の人生が輝かしいものとなること、そしていつか笑顔で再会できることを心から祈っています。



短大生活を振り返って



文学科英語英文学専攻

野口 知香

短大での生活を振り返ると、「花も折らず実も取らず」であるように感じる。

しかし、この二年間が無駄であったと主張したいわけではない。ありきたりな言葉ではあるが非常に充実した時間だった。やりたいこと、知りたいことをなんでも欲張って、最終的にどれか一つに絞るのが難しいがために、花も折れないし実も取れないだけなのである。

大学、短期大学とは非常に良い場所であるように思える。どのように良い場所か、具体的に考えた時に最初に浮かんだのは知的好奇心を満たせる場所であるところだ。私が入学したのは英語英文学専攻ではあるが、英語以外にも様々な講義を受けることができた。例えばドイツ語やフランス語に触れることができたし、日本文学の講義もほんの少しであるが受けることができた。さらに英語もコミュ

ニケーションから英米文学など分野は多岐にわたる。ゼミでは興味を持っていた英語学を学ぶことができた。しかしその中で興味のあるものが多すぎて、卒業論文のテーマを決めるのに非常に難儀したことは記憶に新しい。そしてサークル活動もある。参加するか否かは個人の自由であるが、時間があるならば是非とも参加するのが良いと私は考える。私は、本学に入学してバンドサークルに入部し、初めて長年興味を抱いていたベースを演奏することができるようになった。

しかし、知的好奇心の赴くまま、講義を全て受けようとすることはあまりお勧めできない。初めのうちは何かコマ受講しても授業料は変わらないのであれば、気になる授業をたくさん受講してたくさん学べば良いと思っていた。だが、現実はどういうふうなものではなかった。なぜならば、授業を増やせば増やすほど、自由に使える時間は減るからだ。あまりに単純明快な理由であるが二年間を振り返ってこれはかなり留意すべき点であると私は考える。積み重なるレポート、

課題、小テスト、それにベースの練習や趣味に興じるためには死活問題のバイト。自分のキャパを把握しなければいつか学校生活が崩壊してしまう。私は要領が悪いからなのか、他にも趣味の時間を無駄に取りすぎたからなのか、実際に私は何度か危ない状態に陥ったことがある。ところが、その日々でさえ後から楽しく思えてしまう。そのため一度は自分の限界を探してみても良いかもしれない。

他に思い出があるのかと問われると、具体的にこれと言って一つを挙げることはできない。しかし、その代わりに過ごした毎日が大切な二年間であることには違いない。好きなことを、可能な範囲で好きなだけ楽しむことができたのだ。ジョン・レノンの言葉を借りると、「楽しんで無駄にした時間は、無駄じゃない」。つまり、花も折らず、実も取らずな二年間であっても、好きなことを可能な範囲で好きなだけ楽しむことができたのだ。それだけで、この短大生活は私にとっては非常に有意義なものであったと思える。この年月を財産に、これからも邁進していきたい。

彙報

◎人文学会行事日程

二〇二三年

三月十七日 「会報」第86号発行

四月二十一日 総会・役員交代

(会長Ⅱ文学科長) 遠峯

(庶務) 土肥

- 1 研究調査・資料の収集
- 2 『人文学会報』の発行(年一回)
- 3 研究会・講演会等の開催
- 4 その他役員会が適当と認めた事業

第二章 会員

第五条 本会は次の会員をもつて組織する。

○鹿児島県立短期大学人文学会会則

(一九七七年六月三日制定)

(二〇二〇年四月十七日最終改正)

第一章 総則

第一条 本会は鹿児島県立短期大学人文学会と称する。

第二条 本会の事務所を鹿児島県立短期大学文学科日文資料室におく。

第三条 本会は人文諸科学の発展に寄与し、会員の研究振興を図ることを目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

- 1 普通会员 鹿児島県立短期大学に所属し、人文諸科学に関心をもつ教員
- 2 学生会員 鹿児島県立短期大学に所属し、人文諸科学に関心をもつ文科学科在学生
- 3 特別会員 本会の発展に貢献し、役員会において認められたもの
- 4 賛助会員 本会の趣旨に賛同し、普通会员と同額以上の会費を納入するもの

第六条 会員として入会しようとする者は、入会申込書を会長に提出し、役員会の承認を得るものとする。

第七条 会員は、総会において別に定める会費を納入しなければならない。

第八条 会員は、退会届を会長に提出し任意に退会することができる。

2 会員が、次の各号のいずれかに該当するときは、退会したものとみなす。

(1) 本人が死亡したとき。

(2) 学生会員が卒業したとき。

第九条 本会は普通会員による総会を年度始めに開催する。ただし、必要のある時は臨時的に総会を開催することができる。

第三章 役員

第十条 本会に次の役員をおく。役員任期は一年とする。

会長 一名

庶務 一名

会計監査 一名

第十一条 本会は定期的に役員会を開催する。ただし、必要のある時は臨時的に役員会を開催することができる。

第十二条 本会の経費は、事業収入・寄付金および助成金をこれにあてる。

第十三条 会費は役員会での審議を経て、総会の決議により別に定める。

第十四条 本会の会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。

第五章 会則改正

第十五条 本会則の改正は役員会での審議を経て、総会の決議によって行う。

附則

1. この会則は、二〇二〇年四月十七日より実施する。

○会費に関する総会決議

(二〇一五年十一月二十日)

(二〇二〇年四月十七日最終改正)

本会の会費を次のとおり定める。

普通会員 一年二〇〇〇円

学生会員 二年一〇〇〇円

《編集後記》

人文学会報第八十七号を手にとっていただき、ありがとうございます。今年度は米村大輔先生を文学科に迎えることができました。定年退職などで古い先生がいなくなるのはさびしいですが、新しい元気な仲間がこれからがんばってくれると思うと、とても頼もしく感じます。

この会報のいいところは卒業生に文章をお願いできることです。最近はコロナのせいかわたしが年とったせいかわかりませんがあまり卒業生が訪ねてきてくれないので、会報の卒業生たちの文章を楽しみにしています。卒業生がしっかりと文章を書き、大人になったと思うとうれしいものです。学生だったときには想像もできませんでした。

人文学会報のバックナンバーは文学科ホームページ(<https://www.k-kentan.ac.jp/lit/>)でも見るができます。おひまな時間にぜひのぞいてみてください。

第四章 会計



(土肥 克己)

〈令和5年度卒業研究標題〉

文学科日本語日本文学専攻

氏名

卒業研究標題

《小亀ゼミ …… 日本語学》

- 壹岐沙彩 「おじさん構文」がもたらす不快感の正体
今別府朱花 使用場面から見る「～てごらん」の機能
久保悠奈 マンガにおける「！」の役割と効果について
久保山佳乃 全国共通語の文末詞「カ」と鹿児島方言の文末詞「ケ」の違いについて
高田茉菜 二つの命令形の強制度の違いとその要因
柳田菜帆 キャラクターにおける呼称づけの変化についての研究

《楊ゼミ …… 日本語学・日本語教育学》

- 市川智晶 肯定的評価・否定的評価の機能の分析
中村楓 三者による漫才の展開の特徴
馬場雅 LINE会話における「やばい」の使用現状
肥後杏奈 新語・流行語における定着の傾向 —「ユーキャン新語・流行語大賞」を対象に一
別當新 友人同士の雑談における話題開始部の談話標識についての研究
山下爽桜 コント漫才におけるボケとツッコミの分析
—M-1グランプリ2018年で優勝した霜降り明星と他の出場者の比較から—
吉富真子 依頼談話における依頼と断りに見られる配慮表現の分析
立石萌華 「諦める」の言語ルーツ

《木戸ゼミ …… 日本文学・古典》

- 釜元希美 『曾我物語』における女性の役割
川ノ上裕貴 枕草子に登場する虫に対して昔と現代の人の捉え方の相違点や関連性についての研究
下茂凜花 『落窪物語』における道頼の復讐の残虐性
塩満和香 『平家物語』における平維盛の役割とは何か
日笠山花華 藤原兼家が藤原道綱母に対して不誠実な行動をとったのはなぜか

《竹本ゼミ …… 日本文学・近代》

- 内堀真奈 夢野久作作品における語りの特徴とそれらがもたらす影響
江口佳穂 宮澤賢治『風の又三郎』とヨルシカ「又三郎」にみるアダプテーション事象
白石由香里 宮下奈都『羊と鋼の森』における作者の価値観について
中園恵子 『すずめの戸締まり』二項対立から考える母子関係についての研究
前田希乃華 細田守作品におけるテーマとメッセージ性について
馬庭希乃夏 市川春子『ヴァイオライト』の二面性について
山口愛佳 『ある男』と分人主義

《土肥ゼミ …… 中国文学》

- 上園佳奈 陶淵明の飲酒の詩について
鈴木菜羽 志怪小説における墓を軸にした再生譚
古江昌大 『西遊記』における史実と虚構
山崎開登 古代中国における象徴的なイメージを持たれる植物の特徴について
吉満稜馬 干宝『搜神記』における報恩譚から見る龍の二面性
米満亜子 左遷による柳宗元の詩の変容について

〈令和5年度卒業研究標題〉

文学科英語英文学専攻

氏名	卒業研究標題
《英米文学演習》（指導教員：轟 義昭）	
郷田佳音	小説『ジョゼと虎と魚たち』とアダプテーション映画の比較研究
小湊愛心	漫画『聲の形』とアダプテーション映画の比較研究
園田理果	映画『恋は雨上がりのように』の研究 —原作コミックスとの比較—
玉置文音	映画『スマホを落としただけなのに』の研究 —日本映画と韓国映画の比較—
堀切涼菜	W主人公作品の魅力とは —『TIGER & BUNNY』と『リコリス・リコイル』を比較して—
山神華菜	アメリカン・アニメーションと『ルーニー・テューンズ』 —「バッグス・バニー」をもっと知ってもらうために—
渡邊愛望	『今夜、世界からこの恋が消えても』の比較研究 —小説と映画—
《英米文学演習》（指導教員：ガルシア・アロヨ ホルヘ）	
河内 桜	The Characteristics of Gag Manga in Bobobo-Bobo-Bobo
木脇 幹太	The Influence of Michael Jackson's Music on Popular Culture
下村 祐以	History of American Women
ターネージ 光莉亜	American Values as Seen through Marvel Movies
瀧脇 愛花	How Disney and Ghibli Became Popular and Why People Continue to Love Their Works
《比較文化演習》（指導教員：小林 朋子）	
入佐文華	おとぎ話におけるジェンダーロール —「シンデレラ」「赤ずきん」「眠りの森の美女」から考える—
加治 樺音	『高慢と偏見』と『ブリジャートン家』シリーズからみる英米社会 —社会の価値観が文学作品に与える影響—
新海 由理	「推し」と「偶像（アイドル）」—『推し、燃ゆ』から見る偶像（アイドル）崇拜の歴史—
塚田 愛子	ファッション文化の変遷 —多様性を生み出す媒体としての衣服—
豊田 珠久	結婚観で読み解くジェンダー・アイデンティティ —シンデレラ・ストーリーを題材に—
廣山 鈴乃	美意識の変遷 —身だしなみの化粧から自分を表現するための化粧へ—
《英語学演習》（指導教員：遠峯 伸一郎）	
川口 真子	学習英文法から逸脱した口語疑問文
鈴木 秋桜	『白雪姫』と『アナと雪の女王』から見る英語の丁寧表現
田中 優有	語源でみる中学英語の動詞
野口 知香	『百人一首』の英訳における音節数について
蓮子 侑香	分類別にみるカタカナ英語の特徴
《英語学演習》（指導教員：石井 英里子）	
直 さらら	How Mask Life Has Affected Us: Focusing on Interpersonal Communication
宮内 希乃架	Negotiation Styles between Canada and Japan: How to Negotiate with Clients without Any Problems
浦山 未結	Changing Attitudes through Early English Language Learning
屋島 里咲	The Impact of Language Speaking Anxiety on Japanese English Learners
鳥居 巧将	Frequency and Comprehension of Gestures in Conversation
濱崎 梨那	The Best of All in English Class
真辺 優歌	The Relationship between Perfectionism and Resistance to Speaking English among Japanese Learners of English
米森 陸	English Dialect
和田 彬里	Personality Traits and English Communication Styles of Japanese College Students